様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　４ 月　４ 日現在

機関番号：３２３０４
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2022～2023
課題番号：２２Ｋ１９９９８

研究課題名（和文）複数のCMCの実証的比較に基づく「打ちことば」概念の有効性の検証

研究課題名（英文）Validation of the "Uchi-Kotoba" Concept Based on an Empirical Comparison of Multiple Computer-Mediated Communication

研究代表者
落合　哉人（Ochiai, Kanato）

東京福祉大学・教育学部・助教

研究者番号：００９６２２２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題の目的は、日本語研究においてコンピュータや携帯電話を介する言語使用を取り上げる際、「打ちことば」という独立した概念を想定することがどれほど有効であるかを実証的に解明することである。近年、日本語研究ではコンピュータや携帯電話を用いて産出されたことばを一括して「打ちことば」と呼ぶ動きがあるが、特性の違う複数のメディアにおける言語使用の比較は未だほとんどなされていない。そこで本研究課題では2000年代以降の日本で広く利用されてきた携帯メール・LINE・Twitter(X)・YouTubeといった場で産出されたことばを収集し、主に量的な観点から、共通性と多様性のあり方を記述した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究課題の意義は、主に欧米の言語を対象とする研究で論じられてきた「CMCを一般化できるかどうか」という問題について、言語自体の特徴も、CMCの利用文化も違う日本語環境を対象に検証することでコンピュータや携帯電話といった道具が人間のことばに与える影響の本質的理解に迫った点にある。本研究課題では、実例を対象とした量的分析を中心的な方法として採用し、同じくCMCであっても多様な日本語使用のあり方があることを記述した。一方で、参加構造や話題の組み立て方、タイムラグといった点でCMCに特有の共通性が生じ得ることも見出すことができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research project is to empirically clarify whether it is effective to assume a concept of "Uchi-kotoba" when discussing language use via computers and cell phones in Japanese linguistics. In recent years, there has been a movement in Japanese linguistics to refer to words produced by computers and cell phones as "Uchi-kotoba," but comparisons of language use in multiple media with different characteristics have yet to be made. In this project, we collected words produced in cell phone e-mail, LINE, Twitter (X), and YouTube, which have been widely used in Japan since the 2000s, and described their commonality and diversity mainly from a quantitative point of view.

研究分野：日本語学、CMC研究

キーワード：「打ちことば」　コーパス　CMC研究　LINE　携帯メール　Twitter　YouTube

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

コンピュータやコンピュータと同様の機能を持つ携帯電話等を介したコミュニケーション(すなわち，Computer-Mediated Communication (CMC)）を対象とする言語研究は，通信技術そのものの普及過程の違いから，各国においてそれぞれ独立して展開されてきた．たとえば，イギリスやフランス等ではインターネット接続を伴わない SMS (Short Messaging Service)の分析の蓄積が，アメリカではコンピュータ及びインターネットを用いる IM (Instant Messenger)の分析の蓄積が，それぞれ研究の土台としてあり，談話分析を中心的な手法とする CMDA (Computer-Mediated Discourse Analysis)の名のもと相互に参照されてきた．一方，日本では 1999 年以降，インターネット接続が可能な携帯電話が広く普及した経緯から，携帯メールの表現・表記の分析が進み，その知見をもとに多様な CMC を捉える「打ちことば」の研究が独自に進められている．

「打ちことば」とは，日本大学の田中ゆかり教授による論文を中心として，2000 年代後半以降の日本語研究で積極的に用いられ始めた概念であり，「PC メイル・携帯メイル・ブログ・ミニブログ・SNS (Social Networking Service)のようなインターネットを介したコミュニケーションにおいて，キーボードなどを『打つ』ことによって視覚化されたことばのことを指す」（田中，2014）と定義されている．このように CMC で用いられることばを一般化する動きは，欧米における CMDA の研究史でも“Netspeak”（Crystal, 2001）等同様の動きがあるが，メディアの機能や利用文化，利用者の属性，使用言語といった様々な側面ごとに，言語使用の特徴が一様ではないことが実証されるにつれて絶えず批判もなされてきた．一方，日本語研究においては今のところ，機能や利用状況の異なる複数の CMC の実証的比較がほとんどなされていない．したがって，日本語の CMC を分析する上で「打ちことば」という概念を想定することがどれほど有効であるかについては，そもそも議論が乏しい．

（参考文献）

・Crystal, D. (2001) Language and the Internet. New York: Cambridge University Press.
・田中ゆかり(2014)「ヴァーチャル方言の 3 用法 :『打ちことば』を例として」石黒圭・橋本行洋編『話し言葉と書き言葉の接点』pp.37-55. ひつじ書房

２．研究の目的

本研究課題の目的は，特性の違う複数の CMC 及び，CMC と従来的な話しことば・書きことばの共通点・相違点の抽出を通して，日本語において「打ちことば」という独立した概念を想定することがどれほど有効であるかを実証的に解明することである．

３．研究の方法

本研究では，若年層の東京方言話者による言語使用の比較に基づき，特に文字を基調とする複数の CMC で「打ちことば」と呼び得る特徴が，音声発話による話しことばや書籍等の書きことばと独立して見いだせるかどうか明らかにする．具体的には，2000 年代以降の日本で中心的に利用されてきた CMC 環境である，携帯メール・LINE・Twitter 等の発信に焦点を当て，データを比較可能な形で整備したコーパスを構築する．また，品詞ごとの語彙の構成比率等を手がかりとして CMC 同士，CMC と音声発話（対面会話・電話・講演），CMC と書籍等のそれぞれを比べ, CMC で共通して見られ, 音声発話や書籍等では見られない出現傾向を持つ要素を抽出する．さらに，元データにおいて抽出した要素がどのように用いられているか，個別の語等の特徴に関する従来の言語研究の知見を参照しつつ分析する．最後に，観察から見いだされた CMC の言語使用の特徴が，機能的特性との関わりからどのような体系性を持って生じているか吟味することを通して「打ちことば」という概念を想定することの有効性を見定める．

４．研究成果

本研究課題遂行期間のうち 2022 年度は，既に収集済みである携帯メール・LINE・対面会話・電話の各談話データを，コーパスとして統一的に扱うにあたって再整理し，(a)1 発話に含まれる言語量や特徴語の抽出を行ったほか，(b)通信技術の発展とそれに関連する国内外の研究についてさらなる情報収集を行った．

(a)については本研究課題申請の時点で分析済みであった言語量について，より厳密な形態素解析に基づき検証を行い，同じく CMC である携帯メールと LINE で音声発話と比べても 1 発話あたりの言語量が大きく異なること，また，その背後に既読表示と表示形式の違いがあることを明らかにした．同様に，具体的な（非）言語的要素としては指示詞と視覚的要素（スタンプ・絵文字）について分析を行い，ともに携帯メールから LINE への移行に伴って，コ系の現場指示

の増加や示される感情表現の増加等，より対面会話に近づく変化が見られることを確認した．

(b)については携帯メールと LINE を中心に，通信事業者等が公開してきた情報を広く収集し，1999 年以降の各年において機能がどのように更新されていったか整理を行った．また，特にテキストベースの CMC に関して国内外の研究の文献調査を行い，日本語研究において視覚的要素の分析は諸外国より進んでいる一方，表記の問題として整理されやすい（＝意味までは検討が行き届かない）難点もあり，より正確な実態把握の上で視覚的要素も具体的な言語表現として整理することが有効であることを確認した．

同様に 2023 年度は，(c)Twitter（実施期間中に X に改名）のデータの収集を進めるとともに(d)さらなる「打ちことば」概念の有効性検証の糸口として YouTube を対象とした研究を行った．

まず，(c)については本研究課題採択後のイーロン・マスク氏 Twitter 社買収に伴う特性の変更により，API 等を利用した分析に大きな制約が生じたことから，オフラインでデータ提供者を募ると同時に，オンラインで有効な言語研究を行う方途を模索した．結果，オフラインでの一定のデータ提供を受け付けることができたほか，自らの属性を一般に公開している芸能人等の人物のアカウントをあらかじめ指定することで，特定の属性を持つ話者による投稿を集積する方法を見出すことができた．さらに，直近に収集したデータについて，LINE 及び携帯メールのデータと量的に比較し，CMC の共通性と多様性を具体的に記述することに成功した．

一方，(d)については昨年度の成果として CMC の分析では，テキストのみならず視覚的要素をはじめとする多様なモダリティのあり方を考慮する必要が見出されたことから，配信者と視聴者で利用可能なモダリティが違うライブストリーミングについて検討した．特に，視聴者との交流それ自体を主眼とする「雑談配信」に着目して配信者が視聴者といかにして交流を達成しているか分析したところ，配信者は「極めて多数の視聴者がいる点」や「発話からその反応までに長いタイムラグが生じる点」といった CMC に特有の制約を抱える一方，特殊な引用表現の利用や隣接ペアの利用といった方略によってそのような制約を克服できることを明らかにした．

研究期間全体を通じて，応募時点に想定していた取り組みを達成できただけでなく，新たな課題を見出すこともできた．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 落合哉人	４．巻 1
２．論文標題 「話すように打つ」ことばは簡潔なことばか？：携帯メール・LINE・対面会話・ネット通話における１発話の長さを比較して	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本語習熟論研究	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 落合哉人
２．発表標題 「打ちことば」とは何か：言語学周辺における CMC 研究のこれまでとこれから
３．学会等名 大東文化大学外国語学会日本語部会言語学勉強会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Kanato Ochiai and Mayumi Bono
２．発表標題 Finger Braille as a Personal Medium: Exploring Communication Methods for Deafblind People Based on Computer-Mediated Communication Studies
３．学会等名 First International Workshop on Embodied Semiotics (EmSemi2023)（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 落合哉人
２．発表標題 X（Twitter）再考：CMCとしての位置付けと属性情報付きデータベースの構築
３．学会等名 第55回メディアとことば研究会（招待講演）
４．発表年 2024年

１．発表者名 落合哉人・新山聖也
２．発表標題 YouTube Liveにおける「雑談配信」の談話分析：声で話すVTuberと文字で話す視聴者とのやりとりに着目して
３．学会等名 社会言語科学会第48回大会
４．発表年 2024年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関